

第1回徳島県公立高等学校の在り方検討会議入試制度部会 会議録

I 日時 令和7年8月21日（木）午前10時から正午まで

II 場所 徳島県庁9階 教育委員室

III 出席者 委員8名中7名出席（欠席1名）

（委員）

金西計英委員、木屋村浩章委員、滝川尚委員、竹内敏委員、鳴川幸恵委員、
松本賢治委員、山下真司委員

（県）

副教育長、教育次長、教育創生課長 ほか

IV 次第

1 開会

2 副教育長あいさつ

3 委員及び事務局職員紹介

4 議題

（1）会長・副会長の選出について

（2）本県公立高等学校入学者選抜の現状について

（3）本県公立高等学校入学者選抜制度の改善について

（4）その他

5 閉会

<配付資料>

- ・資料1 徳島県公立高等学校の在り方検討会議 入試制度部会 設置要綱
- ・資料2 徳島県公立高等学校の在り方検討会議 入試制度部会 委員一覧
- ・資料3 昨年度の検討経過
- ・資料4 本県公立高等学校入学者選抜制度の変遷
- ・資料5 今後の開催スケジュール（予定）

V 会議録

（開会）

（副教育長あいさつ）

徳島県教育委員会 副教育長の松本でございます。

第1回「徳島県公立高等学校の在り方検討会議 入試制度部会」の開催にあたり、県教育委員会を代表いたしまして、一言、御挨拶を申し上げます。

本日、お集まりいただきました皆様方には、日頃より、本県教育発展のため、格別の御理解、御協力を賜っておりますことに、この場をお借りいたしまして、厚くお礼申し上げます。また、このたび、本部会の委員就任をお願いいたしましたところ、御多忙にもかかわらず、快くお引き受けいただき、深く感謝申し上げる次第でございます。

さて、県教育委員会では、これまで、社会状況の変化に対応しつつ、多様な生徒の個性を伸長することを重視し、併せて、各高等学校・学科の特色にも配慮しつつ、その教育を受けるに足る能力・適性等を総合的に判定できるよう、入学者選抜制度の改善を図ってまいりましたが、昨年度、通学区域制の見直しを検討してきた有識者会議からは、通学区域制の撤廃によって、中学校での進路指導や生徒の進路選択に影響を与えることから、入学者選抜制度の改善が必要であることや、県立高校に対する生徒・保護者のニーズは多様化していることから、中学生が自身の「得意分野」、「興味・関心」及び「将来の進路先」等を考えて、将来の自己実現につながる志望校を主体的に選択できるようにすることが望まれること、といった御意見もいただいているところでございます。そこで、本部会におきましては、有識者会議の議論を引き継ぎ、7月に設置されました「公立高校の在り方検討会議」と並行して、さらなる社会状況の変化に対応した、公立高校入学者選抜制度の改善について御検討をお願いいたします。

皆様方が部会で議論を重ね、御提言いただく内容をもとに、最終的には、県教育委員会が責任を持って、公立高校の入学者選抜制度の改善に関する方向性を決定したいと考えております。委員の皆様方におかれましては、様々な角度から、忌憚のない御意見を賜り、本県公立高等学校の入学者選抜制度の改善について、十分御議論いただきますようお願い申し上げます、私からの挨拶とさせていただきます。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

(委員及び事務局職員紹介) 事務局より紹介

※所用のため副教育長退席

(会長・副会長の選出)

委員の互選により、金西計英委員が会長に、竹内敏委員が副会長に、それぞれ選出された。

(会長あいさつ)

徳島県公立高等学校の在り方検討会議 入試制度部会の会長就任にあたりまして、一言、御挨拶を申し上げます。

このたび、私ども8名の委員は、本県公立高等学校の今後の入試制度の改善について、多角的な観点から検討を進めるという、誠に重大な使命をお預かりすることとなりました。また、私ども2名に対しましては、本検討会議の会長・副会長という重責をお与えいただき、身の引き締まる思いでございます。先ほど副教育長からも御説明のあったとおり、高校の特色化・魅力化と併せて、公立高等学校の入学者選抜制度の改善について、意見を取りまとめる機会をいただきました。本部会におきましても、これまでの議論を引き継ぎ、より改善していくことが重要であると考えております。幸い、この部会には、県内外から、様々な立場の方が、委員として御参加いただいております。そうした皆様

方の、経験と知見を生かしつつ、未来を担う子どもたちにとって、どのような入試制度を整えていくことが望ましいのか、具体的な方向性を整理し、教育委員会に提案することが、本部会の役割だと捉えております。委員の皆様方におかれましては、活発な御議論をいただき、会議の運営に御協力いただきますよう、どうぞ、よろしくお願いいたします。

（議題）

本県公立高等学校入学者選抜の現状について、事務局より、「資料3」に基づき説明。
本県公立高等学校入学者選抜制度の改善について、事務局より「資料4」に基づき説明。
その後、意見交換。

<金西会長>

それではメモに従って、それぞれ御意見を賜りたいと思いますけれども、まず受検の機会に関することでございますが、皆様から何か御意見等ございますでしょうか。

<木屋村委員>

先ほど事務局から説明を受けた内容について、協議に入る前に確認しておきたいことがあります。通学区域制に関する有識者会議の報告書（資料3）の中の枠組みの最後の方に「将来の自己実現につながる志望校を中学生が主体的に選択できるようにすること」、「複数回の受検が可能になるよう、入試制度を見直すこと」の記載があります。それらを前提に議論、意見を出していくという認識でよかったですでしょうか。

<金西会長>

そうですね。はい。ありがとうございます。これ親会との兼ね合いもありますけれども、今いただいた話について、事務局の方から特に何かありますか。

<事務局>

はい。前提として主体的に生徒の皆さんが選択できるような制度ということで、有識者会議から提案をいただいておりますので、これについてまずは検討をお願いしたいということです。ただ、検討の結果どうなるかは別の話だと思いますが、そういう視点でまずは入試制度を検討していただきたいと思います。

<金西会長>

ありがとうございます。ということでございます。むしろ、ここは決定機関ではありませんので、最終的には教育委員会でお決めいただくことなので、広く、むしろ議論としては、いろんな御意見を、ここで検討したほうがよいと思います。広く考えていただいて、いろんなアイデア等出たほうがいいのかと思います。あまり予断なく、広く考えていただければと思います。はい。

<木屋村委員>

それでは、その趣旨も踏まえながら言わせていただきます。この「受検機会」を中学生目線でどう捉えるのかという問題もありますが、受検を実施する高校の立場として、現行制度では育成型選抜、一般選抜、第2次募集選抜と3回実施しています。仮に回数という観点で見れば、おそらく他県も同じだと思いますが、現在いる高校生、つまり在校生への教育の質・量をきちんと確保する上で、3回が上限だと思います。やはり在

校生への教育をしながら、高校入試の実施をしているためそう感じています。

<金西会長>

ありがとうございます。今の高校の現場の方から、受検機会に関する御意見賜りましたけども。そうですね、今いただいた件に関して何か、回数に関してでも構いません。

<松本賢委員>

受検の回数については、今話ありましたように、現行の育成型選抜、一般選抜、第2次募集選抜というふうに、3回以上の回数を設けることは、中学校でも、それから高等学校の実情を考えますと難しいように思います。以上です。

<金西会長>

そうしましたら、中学校現場からの御意見はいかがでしょうか。

<滝川委員>

今ありました通り、現状の3回であっても、受検する生徒にとりましても、それからその出願にあたる現場の指導をする立場にある教員にとりましても、かなり短期間に3回分の準備を進めなければいけないうえに、正しい情報も生徒に伝えながら、進めなければならないことになるので、今お二人の委員の先生方がおっしゃった通り、3回というのが回数としては限界なのかなというふうに思っております。

<金西会長>

ありがとうございます。他に何かございませんか。

<山下委員>

生徒自身が自己実現に繋がるような、志望校を主体的に選択できることは目指すところだと思います。ただ、その条件として複数回受検が可能であるっていうことは、私もちょっと少し慎重な議論が必要なのかなというふうに思っております。先ほど御指摘もありましたような運営上の問題もありますが、ここで目指すところの本質は生徒が本当に自分の学びたいところ、もしくは将来の夢を実現するために高校の選択をするのかっていうことが、より現状よりも精度高くマッチングできるというところであって、必ずしも回数ではないのではないかというところの含みはあってもいいのかなというふうに、少し感じました。

<金西会長>

ありがとうございます。そうですね。文部科学省からはこういう複数回っていうことが、提案されているわけですね。今後どうなのかっていうことではございますが。今日はここでこれに関して特に何か決めるってことでありませんけれども、今後、議論を進めていく上でも、個人的にすみません、県外の状況とかも知りたいですし、他県の状況も資料があつたら、また次回以降とか、可能であれば。今日はまだ特になんとも思いませんので。僕も薄い知識で申し訳ないですけど、どこかの県によっては複数、もう少し回数が多いいところとかもあるとかいう話もございますので、その辺のことも他の県の状況も含めて。ただ基本的に、現場の今のお話をお聞きしてもその3回、現状でこれ以上回数を増やすっていうことを検討するとしても、どうするんだっていうことの話になると思いますので。なかなかその回数を増やして、理想的には複数回数が増えたほうがいいのかもしれませんが、それはなかなか難しいのと。単純に回数を増やしても、中学生がそれはわかるのかどうかってことですね。なかなか難しいかもしれません。はい。あ

りがとうございます。他に何か。これに関して御意見はございますでしょうか。

<竹内副会長>

親会の方で、「複数回の受検が可能になるように」というのをわざわざ明記されているってことは、現在の受検のシステムに疑問を持たれているということだと思います。中学校現場とか高校現場は複数回しているというふうに思っていますが、親会の方ではこれを複数回ととらえていないのは、どこにそのズレがあるのかなっていうのを知りたいなと思ったんですけども、どのような御意見だったんでしょうか。

<事務局>

親会ってというのが昨年度の通学区域制に関する有識者会議の提言によるものでございまして、現状の入試制度の複数回のとらえ方ってというのは、どういう形でとらえた上で提言されたのかということではありますが、その学区制が見直しになって、ここに書いてあるとおりですけれども、学区に限らず、自由に選択ができる、選択の幅が広がる。そういう中で、チャレンジすれば、それによって不合格という事態も生じるので、そういう場合に、制度として主体的に選択できる入試制度、何回かチャレンジできるような制度だったらいいという趣旨だと思うので、現状のこの3回が多い少ないということを指摘した議論ではなかったのかなと思います。

<金西会長>

そうですね。ありがとうございます。今の事務局の御説明のとおり、私も会議に出たときの薄い印象なので、ちょっと議事録とかをきちんと見ないといけないと思いますので、正式なところは議事録等の確認をしていただければと思いますが、今御説明いただいたような確かニュアンスだったと思います。特にいろいろ懸念されていたのは、徳島市内の高校に受検生が集中することによって、市内の生徒が外に、表現よくないですけど、はじき出されることがあったときに、受検の機会が1回だけではちょっと少ないので、再チャレンジできるような機会とかを設けることができればいいのではないかと、みたいな方向での、回数が今の3回が、全然十分ではないとかいう話ではなく、いろいろご父兄の皆様とかのご懸念があって、何かチャレンジできる回数で不利益にならないような方向として1つその複数回というような、確か出たような記憶があります。はい。ちょっと補足です。はい。

<松本賢委員>

私も議事録をもう1度確認しないと確かなことは言えないですけども、この複数回の受検のとらえ方として、上の表で言えば、一般選抜のこの機会というふうにとらえております。受検機会を増やすことが、この2次募集も含めて、計3回ということではなくて、一般選抜での考え方というふうに考えています。以上です。

<山下委員>

先ほど話とかぶるかもしれませんが、回数だけを議論するっていうよりは、例えば出願方式、単願であるか併願であるとか、それから今回の文科省の中でDA方式みたいな話を聞いています。そのようなところで、中学生の生徒さん達が本当に学びたいところにどうやったらいけるのかっていうことこそ、自分の得意分野を生かしながら、という仕組みを考えるということが、この複数回というところの議論に含まれているのではないかなというふうにとらえています。ただ、回数だけではないんじゃないかなと思います。

<金西会長>

多分、今後の議論のことになってきますので、あまり先走りしても申し訳ないですけども、まさに回数の話で回数というのは、今年度、石破首相から何かその文科省の方に話がおいていって、今むしろ、世の中の注目を集めているのはその複数の機会は回数より、複数選抜の方に動いているような話を、その辺がちょっとまた今後その事務局の方に申し訳ないですけど、資料等をちょっといろいろ集めていただいて、その辺の資料、特にデジタル併願制とかいう話が出ておりますので、その辺はちょっと我々も今、十分な資料と持っていないので、その辺の今後の在り方ですね。現状では単純に回数の問題というよりも、選択制を含めてですけど、複数選抜っていうか複数選択できるような枠組みを含めての回数の機会を増やすっていう、あまりいうと予断になってしまうので。でもどうもそういうふうな方向なのかなっていうのは、ちょっと見え隠れしていますけれども。今の件に関して何かまた御意見等がありますか。

<木屋村委員>

複数回という回数にこだわっているわけではないのですが、大学入試と同じような仕組みをイメージしてしまいます。高校生が大学を受験する際に受ける大学入学共通テストみたいな試験を受けて複数校に出願するみたいな仕組みです。徳島県は地理的な状況で徳島市内とかには学校数が多いものの、県西部とか県南部はそれほど多くない。その場合に懸念する点として、受検生や保護者の方からすると選択肢が結構限られてしまい、結果的に特定の地域の学校に偏りみたいなのが生まれる可能性もあります。あくまで仮の話ですが、第1希望で学校数が多い地域の高校を選んで、第2希望は地元を選ぶみたいに。慎重に議論をしておく必要があると思っております。

<金西会長>

このことに関して、今年になってから議論が活発になっておりますので。多分いろいろ資料等が今後いろんなところからも集まるのではないかなというふうにはちょっと期待しておりますので。また、皆様と意見交換できればと思いますが、必ずしも回数にはこだわらず、その学生さん、学生の皆様がその自己実現、主体的に志望校を選択できるようにということが重要でございますので、その辺の方法に関しても、1つの手段として、回数ってことが言われていますけれども、その他含めていろいろ制度が検討できればというふうに思います。

せっかくですので、一通りちょっと終わったものですから、どうぞ。

<鳴川委員>

すみません。会議に遅れてしまいまして、申し訳ございません。鳴門高校の校長の鳴川と申します。本日よろしく願いいたします。

<金西会長>

出席早々に申し訳ございません。選抜制度の改正の意見交換を今日は主にやっているところでございますが、せっかくですので、ちょうど今、1番目の受検の回数に関する話をしていたものですから。はい。木屋村委員の方からもその高校の現場に関する意見とかをいただいたところですけど、鳴門の高校の意見ですが、回数をどうか、増やしたほうがいいのかとか、現状の回数で十分なのかとかいう話をちょうどしていたところですよ。どういうふうにお考えですか。

<鳴川委員>

個人的な考えとすれば、やはり回数というか、チャンスを与えるという面では、増やした方がいいのかなとは思いますが、しっかり進路選択をできていれば、自分たちがその学校の特性とか、自分たちが学びたい学校を選べていれば、入試回数は1回で決められますが、学区制がなくなると集中してしまうことがあると思いますので、その場合は、やはり、次のチャンスが必要かなと思っております。

<金西会長>

今いただいた話も今までの意見交換とそんなには大きく異なった話ではございません。はい。ありがとうございます。ですから回数は回数としてですけども、やはりそのチャンスをどういうふうにするかっていうことの方が、受検生の皆さんが不利にならないような保証を担保するってことが重要です。はい。今後、その回数の在り方を含めて検討できればというふうに思います。とりあえず、アに関してはよろしいですか。

続きまして、イの多様な能力を評価する選抜方法に関することってということで、育成型選抜の在り方とかスクール・ポリシーを反映した入試の在り方という、その多様な選抜方式に関しまして何かございますでしょうか。

<木屋村委員>

先ほど事務局の方から、本県の公立高等学校入学者選抜制度の変遷（資料4）について説明を受けました。5ページの下に主な課題として4点あがっているかと思います。私も、多様な能力を評価できる仕組みっていうのは良いことだと思います。ただし、過去から現在の育成型選抜への変遷を見てみると、どちらかといえば、運動部の部活動を中心に顕著な活動による出願という形になっています。中学生の側から見たらなのですが、現行の育成型選抜は中学校のある地域、生徒数による中学校の規模などに左右されます。対象となる生徒が限定される、言い換えると出願できる生徒が限定されることになっていないのかと思ってしまいます。ちゃんと調査して、受検生の声を聞いたわけではありませんし、先ほどの議題と重なりますが、育成型選抜については、特定の生徒しか出願できない制度になってしまっているのではないのか気になります。特にスポーツ中心になっていると思うのです。議題イについては、それを感じます。

<金西会長>

ありがとうございます。多様な能力っていう趣旨でございます。むしろだから広くいろんな中学生の皆さんがチャレンジできるってことが趣旨ですけど、実質こうなのかなっていいかなって思いますけれども、なかなか難しい。結局、実質むしろ多様性が絞られちゃっているんじゃないかな。

<鳴川委員>

スポーツ、運動部に偏りがあるってことも、もちろん1つかなと思ってます。鳴門高校の場合は阿波おどりとか、そういう文化的な生徒も、運動部がメインではありますが、それ以外に阿波おどりの生徒さんも数名受検できるようになっているので、そこら運動部だけでなく、文化部っていうのも、今、入試の中では進んでいると思いますが、逆に阿波おどりにおいて、多様性って、何をもって評価するかっていうのが、多分難しいかなというふうに、例えばスポーツだったら、ある程度その実績とか、やってきたことがしっかり評価しやすいですけど、阿波おどりとかを評価するっていうのは、

文化の評価っていうのは難しいかな。でも、子どもたちが頑張ってきた、多様な能力を生かせたらもちろんそこも評価に入れていかなければいけない気がします。

<山下委員>

私がちょっとまだ十分理解できてないところがあるので教えていただければと思っておりますけども、今の5ページのところですね、育成型選抜の育成とは何をもって育成型選抜とおっしゃっているのかがちょっと読み取れなくて。大学受験等々でいけば、島根大学さんだったりお茶の水大学さんであったりとか高大接続の観点から、大学教育と高校教育との接続を図りながら、生徒を育成していくって、本当に学びたいところなのか、その大学で学びたいことが獲得できるのかっていうところを、お互いが確認しながら、受験をしていくっていうのが育成型入試って言われるんですけど、そういった意味でこの中高接続という観点で、このポンチ絵で描かれているスケジュールの中から、何かそういった育成型の観点が含まれた選抜なのかどうかっていうのをちょっと教えていただければと思います。

<金西会長>

ありがとうございます。多分この資料4の8ページのところですが、育成型選抜のここですか、ちょっとすみません。事務局等も含めて、育成型選抜の枠組みのちょっと説明をお願いします。

<事務局>

従来の特色選抜から育成型選抜へと変更していますが、一般的にはその運動部活動なり文化部活動なりで、中学校時代に実績あげて一所懸命取り組んできた、そういった能力を高校に入っても、伸ばしていく、育成していくという意味だと思います。スポーツ、文化以外にも、スクール・ポリシーに基づいて、学校側が求める、こういう生徒が欲しい、こういう能力のある生徒がいれば、入った高校の教育方針に基づいて、よりそこを伸ばしていけるっていうところで、そういう分野を設けて、育成型選抜として入試をしています。少しざっくりとした説明になりますけれども。

<金西会長>

8ページのところの①必須資料で、調査書とか、学力検査とか、活動記録とか何か様式とかってあるんですか。決まっているんですか。様式が。文化部もここにいろいろ活動を記載してっていうことですね、自分はこんなことやってきたとか。あとはでも、当日は普通の試験。

<山下委員>

対象が偏っているっていうところを是正するっていう形で、変革されたんだろうということは理解できました。ただ、本質的に中学生が自分の進路をどう実現するのかというようなところの中高の接続の支援っていう観点と、少しくニュアンスが違うのかなということも含めて理解いたしました。

<金西会長>

そこがこれも実際はですね、課題としては、育成型選抜の在り方っていうのが5ページで上がっているって話ですし、中学校側としてはどんなふうに捉えておられますか。

<滝川委員>

今ちょうど出ているところですけども、平成23年度から令和4年度の特徴選抜・一

般選抜のときにも、募集する種目の分野で運動部が多く、文化系が極めて少ないという反省があり、育成型選抜の現行の形になっているけれども、実情を見てみると、やはり運動部の定員がどうしても多くなっているというところがあるので、先ほどの受検機会の回数に関することとの関連で言うと、3回あるけども1回目の育成型に関しては、多くの生徒を対象にできないというところがありますので、今回は、この入試の在り方、制度の在り方を検討する会議なので、その部分について、育成型の在り方についてもう少し検討し、多くの生徒がエントリーできるような仕組みになっていくことは、とても望まれることだろうというふうに考えます。

<金西会長>

多様性っていうところですが、実際、すみません。活動記録とか作るのは大変なんですかね。

<滝川委員>

活動自体は運動部であれば、運動部の実績がありますし、先ほど出た阿波おどりであれば、例えば、学校で活動していたわけではありませんが、連に所属して活動をしていたという実績がありますので、それは大丈夫だと思います。ただ、選べる生徒に限られてくるという点では、もう少し多様な能力を選抜できるような形だと、生徒の立場からすると、育成型のところ、もう少し積極的にエントリーできるのかなというところだと思います。

<金西会長>

何度も聞いても失礼ですけど、やはりこれに手を挙げてくる子とかたくさんいるんですか、実際。これで入試したいですっていう。

<滝川委員>

はい。その年によって変動はありますが、活動実績がある生徒は限られていますので、多くの生徒が受検するわけではありません。

<金西会長>

現実問題、制度があってもなかなか大変っていうことですけども、はい。

<竹内副会長>

特色選抜のときは、スポーツ・文化と、「その他高校が定める特色ある活動について」とあったのが、現行制度ではそこが「各高校のスクール・ポリシーに関連した分野」というのに変わっています。高校が特色を持ってこんな学校を作りたいのでこんな生徒に来て欲しいっていう、そういうのを打ち出して、それを見て中学生が選んでいくっていう、そこが目指しているところかなと思います。普通科のスクール・ポリシーをちょっと見せてもらおうと、各校が大きなところを書かれているのでよく似ていて、中学生がスクール・ポリシーを見て高校を選べるのかなって感じました。実際、今スクール・ポリシーに関連した分野って、何か具体的にあるんでしょうか。

<事務局>

いろいろあるんですけども、具体的にいえば、例えば理数探究分野、徳島北高校であれば英語運用分野とか、専門高校であれば、農業、林業、環境分野とか。ボランティア活動や奉仕活動をスクール・ポリシーに掲げている所は、その分野での活動、地域貢献活動ですね、そういったものもございます。徳島市立高校では、デジタル分野を令和

8年度入試から追加しています。

<金西会長>

今のですから、スーパー・サイエンスとかの指定を受けていれば、それがスクール・ポリシーに書かれているかどうかわかりませんが、募集要項にスーパー・サイエンス（SSH）に関連する事項のことがやはり要項には書かれているっていう理解ですかね。スーパー・サイエンスで長所とか、何を書くかというのは難しい。難しいですね、現実問題は。一応でも育成型選抜においてそういうのも対象でやっているっていう理解でよいってことですね。実際問題でも文化部の学生さん、スポーツと文化系の育成型の選抜って難しいですね。現実問題。中学生もそれがよくわかっているかどうかというのはあるかと思う。

<松本賢委員>

先ほど徳島市立高校の話がありましたので。徳島市立高校の場合は、学力とスポーツと芸術、この3本柱で学校は頑張っております。今のこのテーマと結び付けると、いろんなものが絡んでくるんですね、パッと考えられることが。これちょっとあんまり風呂敷を広げるといけないんですけども、調査書の件を一番に考えてしまいます。育成型ということで、実際その高校の先生方が、スポーツだったらスポーツで成績が優秀な人、文化面ではオーケストラ等、随分と学校、中学校とも話しながら、生徒が試験を受けられるようにしています。今、日本の流れで全国的な流れでいいますと、この調査書なんかは一番にこの選抜に関しては気になるところです。調査書の中身が今の育成型選抜や一般選抜に合っているのかどうか、気になったところがございます。中学校の事務局の滝川先生がおいでしているので、そういう話は中学校校長会で出てこないのかなっていうことはどうでしょうか。

<金西会長>

調査書の件も資料4の5ページのところにも、高校、中学校から課題として調査書の記載内容の見直しと上がっておりますが、どうですか。

<滝川委員>

はい。調査書についても、確かに調査書に記載しなければならない内容が、本当に選抜をする上で、全部必要なのかどうかというあたりは、感じているところです。やはり高校側にとって必要な情報のみを記載するべきだと思います。それも含め、今回の制度改革の中で出願をよりわかりやすいものにしていただきたいと思います。

<金西会長>

調査書の項目はいろいろ、現状でもその主体性の評価とかも中教審での主体性が図れるのか図れないのかっていうのもありますし、内容がいろいろ、課題のあるところではあると思うんですよね。

<松本賢委員>

選抜方法にかかるものの1つとしてやはり、私が今、発言させてもらったんですけども、例えば、資料6ページに高等学校入学者選抜等にかかる配慮事項、ここの中略の下、3行目、真に必要な事項に精選することと。ちょっとこの文章読んだときに、やはりこの調査書と関係してくるのかなというふうに考えました。具体的にどのようにとらえたらいいのかなっていうふうには、まだいまだにはっきりと私自身も真のっていう、

まことってなんだろうかというふうなところで、ちょっと疑問を思っているんですけど。そういうところから、調査書のことについて発言させてもらいました。

あと、スクール・ポリシーを反映させた入試ということについては、それぞれの高校側が本当に努力しているところだと私はとらえています。限られた字数の中で、例えば3行であれば、行間の中に随分と言葉を凝縮させて、それで高校側が受検生に、または、中学校に、保護者にわかりやすいように、説明を凝縮させているので、苦勞しているなというのを、見るたびに思いますので、しっかりと高校の方が中学校への説明、また中学校の方から高校への質問なんかで、中学生に、受検生におろしていくのができれば、いいんじゃないかなというふうに思っております。多様という言葉って使われやすいと思うんですけど、ここから少し絞ったような形をとっていただければいいんじゃないかなと私自身も思っております。以上です。

<山下委員>

今の話に少しちょっと関連してなんですけど、資料3のですね、上部の枠囲みの中の中段のところに、スクール・ポリシーを一層明確にした上でというふうな記載があると思いますが、ここは結構大切なポイントだなと思っております。全国の高校、実はいろいろと取材したり研究したりしている立場ではありますが、今お話があったように、各学校がそれぞれの特色を生かしながら、どうスクール・ポリシーを策定していくのかっていうのを試行錯誤されているっていうのは、もうひしひし伝わり、理解しています。ただ一方で、本当に、より明確になっているのかっていうところは、まだまだ余地はあるんだろうなと思います。だからこそ、ここに「一層明確にする」っていうことが書き込まれているんだろうなと。この部分が、中学生が高校を選ぶにあたって、本当に自分がどこで学ぶのかっていうところに非常に大きく繋がっている部分ですし、先ほどの議論の選抜方式の中にも非常に関連が高い部分なのかなと。このスクール・ポリシーの明確化っていうところも、多分この会議ではなくて上の会議かもしれませんが、あわせて議論が必要なのかなというふうに思います。

<金西会長>

ありがとうございます。多分、産業教育とかを担っておられるような高校さんとかにおかれましては、やはりそのスクール・ポリシーの明確化っていうのが、やはり、去年の出願率、入試の実績とかを12ページを見てもわかるように、やはり産業教育とかをやっておられる高校とかが軒並みなかなか厳しいところや、スクール・ポリシーがきちんとどこまで中学生に理解されて、彼らの将来の自己実現に寄与しているのかというのが非常に難しいところありますので、そういうところと職業教育を担っておられるような高校とかが、この育成型選抜とか在り方をまた考えて、ちょっといろいろ大変だと思います。その辺も含めて検討事項かなと思いますし、今の議論で多分、調査書の在り方もここで一応検討をということにはなるんだろうとは思いますが、ただ、何度も申し上げる通り、決定機関ではありませんので、調査書は今後どうかなっていうことが1つの方向性として、調査書の在り方に関しても議論すべきような項目じゃないかなというふうにはちょっと理解をいたしました。

<木屋村委員>

今の話に関連しますが、中学生にとって、スクール・ミッションを含めてスクール・

ポリシーはわかりにくいのだと思います。まだ自分の将来について具体的に考えるだけの経験を積んでいないからだだと思います。高校生も同じです。中学校段階で、きちんと理解するのは難しいと思っています。そのため、私の高校でも毎年中学生体験入学を実施して、スクール・ポリシーについて分かりやすく説明しています。感覚的な話になりますが、参加中学生は高校の雰囲気だとか、そこで過ごす高校生の様子を見て、良いとか、行きたいとかを感じているのだと思います。当日参加している中学生に「今日はどうしてこの高校へ体験入学に来ること決めたのですか？」と尋ねると、「中学校の先生に勧められた」とか、徳島県は学習塾に通う割合が高いので「塾の先生に勧められた」という者もありました。複数校の体験入学に参加して比較している中学生もありました。このことから、中学生は誰かの助言もあったりして前へ踏み出している感じです。ただ、中学生が高校選びで一番気にしているのは学力だと思います。その他には、高校で学習内容があり、今の時代なので、学校の規模や希望する部活動の有無があります。それから通学距離も大きいようです。今あげたようなことが高校選びの要素になっていると思います。推測ばかりですが、実際に中学生がどういうことで高校選びをしているのかは、厳密な調査とまではいかななくても傾向を掴むことをやってみてもいいのではと思います。

<金西会長>

実際中学生がどうやって高校を選ぶか、スクール・ポリシーはそれぞれの高校がどういうふうに学習を保障するっていう学習展開、大学も同じですけど、今は予めきちんと提示しておくっていうことで学習者もそれを見てくるっていう。理解して自分の自己実現のために、なかなかでもおっしゃられる通り、そこがなかなか浸透していかないっていう、浸透するための何らかの努力っていうのが別途必要なんだなあというのは思います。オープンキャンパスもそうですが、私立大学さんのきれいな環境にはなかなか惹かれてしまうので、環境とかの影響が大きいと思っています。

今後、徳島県の場合、この育成型選抜の在り方についての検討と、今日幾つか指摘されましたが、調査書の方向性っていうのは今後検討していきたいなというふうには考えますので、よろしくお願いします。とりあえず、イの方よろしいですかね。

そうすると、次にそのウの課題ですけれども、生徒の多様な受け入れに関することですけれども。やはり、文科省とかからは、教育機会の確保の点から、結局、学習者がもう多様化しておりますので、単に出席日数とかだけでは決められないっていうようなことがございますので、先ほどまさにもう、今の議論で出て参りましたけれども、調査書の在り方っていうことが、検討することが文科省からも求められておりますので、そういうことも含め、先ほどの委員の議論とも関連しますというか、少しかぶってしまいますけれども。調査書のことも含めて生徒の多様性の受け入れに関することに関して何か御意見ございますでしょうか。今のところ少し、調査書のことは出ていますけれども、そういうことも含めてですが、いかがですか。結局、不登校だから不利益にはなっていないっていうふうなこともありますので、現実問題。

<木屋村委員>

受け入れる側の高校としてお話します。生徒のニーズや考え方の多様化が進んでいて、近年は保護者の考え方からも影響を受けていると感じます。しかし現実問題として、様

々なニーズに応えるだけの人員が足りないという状況です。例を挙げれば、教員のなり手不足で十分な教員数が確保できないとか、部活動で言えば、運動部、文化部ともに専門的な指導が行える教員は人員が限られていて、様々なニーズに応えられないというのが実情です。それは全国的な課題になっています。なお、多様な生徒の受け入れについて、高校では、中学校での欠席日数が多いからといって単純に排除する（入学を認めない）のではないということはお伝えしておきたい。

<金西会長>

ありがとうございます。そうですね。人口が減っていますので、規模がどんどん縮小するとあまり、よろしくない。また、生徒の多様性とかに関しまして何か御意見ございますでしょうか。中学校とかだったらどうですか。

<滝川委員>

すみません。先ほどの欠席の話と重なってくる内容ですけれども、今、高校側の発言で出てきた、欠席日数が単純に多いからといって排除するものではないという点は、中学生にとっても、それが広く知れ渡れば、欠席のことをそんなに気にしなくていいんだなという、受検者目線で考えますと、一つ安心材料になるという部分だと思います。日数の記入は必要かもしれないけれど、理由の部分は書く必要はないということが明確なものになれば、生徒たちが安心して受検ができるということに繋がると思います。

<金西会長>

生徒さん自身も非常に多様なですね、出席のことも含めて、いろんな生徒がおりますので。調査書だけの話ではないですけど、多様性に関して全般ですが、他に何か御意見、ございませんでしょうか。じゃあ、鳴川委員どうですか。

<鳴川委員>

はい。すみません。今、木屋村委員からもお話があったように、最近、多様ってというのが生徒さんだけでなく保護者の考えも多様ですので、本当にそのニーズに応えるためには、現在すごく現場では苦勞しています。で、お話があったように、専門の先生とか少ないし、でも保護者の方は、その専門性を追求されるというか、保護者の方には、例えば、バスケットボール部で指導される先生がいたとして、私は体育教員ですけれども、体育教員ってそんなに、各学校、5、6人ぐらいしかいない。うちは大規模校なので、700、800人ぐらいの規模で、5人ぐらいの教員がいるんですけど、それを16部活動の先生方が全部ご専門の先生とは限らない。学校とすれば、その中学校とか高校とか、他教科、体育以外の教科でも、専門性があるなと思うような先生にお願いして、活動をお願いはするんですけども、保護者の方は、もっとご専門の方にか、そうするとすべての部活動で専門の人が必要となるとそれだけの人材もいるようになって、そういうふうな、多様なってというのが、それとその多様なところを受け入れるんだったらもっとしっかり人材をとというふうな保護者の要望もあるので、そこを、どのように調整しながら、保護者の方に生徒たちに答えた形で運営したりしていくというのが大変だと思います。あと多様性が最近多いので、例えば、特別支援が必要なお子さんとかも、多様なという言葉を使うし、そういう幅広く使われる多様性っていうのが学校としては苦慮するかなと思います。

<金西会長>

はい。多様なんですね。いろんな意味でも多様性がありますから、大学とかも、いろんな学生さんがたくさんいらっしゃるの、どんどん、その辺は対応をなかなか、いろんなところで対応を苦慮しているような感じですね。

<山下委員>

ちょっと違った観点から。先ほど出た不登校とか不登校傾向の子どもたちが今増えている。小中学校あわせて34万人、中学校だけでみても21万人という話と、徳島県の昨年の出生者数が3,700人ですか、全国的に見てもかなり厳しい状況であることは間違いないと思います。そういった中で不登校傾向の子どもたちがこれだけ増えているってことは、何を生徒たちはメッセージをしているのかを私たちがどうとらえるかということが、考えるべきアプローチなのかなというふうになんかちょっと思った次第なので、発言させていただきました。

<金西会長>

今までそういうことにはなっていませんけど、単位制とかの柔軟な取り扱いができるようになれば、多分、単に学校に行かない、コロナで幸いオンラインのいろんなことが発達しましたから、オンラインで行かないだけで、能力がある人がたくさんいるってことも発覚しましたので。別に自宅でいろんなプログラミングに長けている人とかは、仕事いくらでもできたりしますので、今後、そういう、場所は問わないような形でのその単位。弾力的な運用の仕方とかも、オンラインでの学習とかも充実とかは多分出てくるのかなというのは、まだそのそういうように全部できるような、卒業までできるような形にはなっていませんけれども、そういうオンラインの通信制の教育と高校との連携とかがひょっとしたら出てくるかもしれないっていうことがあるかもしれませんね。

<松本賢委員>

生徒の多様な受け入れに、高校がこれからもっともっと苦慮されてくると思います。今の小学校、中学校の保護者を見ていますと、また生徒を見ていますと、それこそ先ほどから言われていたような、多様な考え方をお持ちの方が多くなっています。それを通して、無理を通しての方が多くなっているように思います。それが3年後、5年後、また、高校進学に絡んでくると、厳しいなというふうには思っております。だから、私の個人的な立場として、中学校の高校説明っていうのは、やはりこれからできることできないことっていうのをしっかりと説明していかなければならないなというふうなことを感じています。以上です。

<金西会長>

ありがとうございます。それから、保護者との在り方も大変だと思います。はい。

<竹内副会長>

私は中学校教員出身ですが、私が教員をしていた昭和の時代っていうのは、平均的な子を育てようというか、その子どものできないところにしっかり先生が関わり総合点上がるような方法をやってきたのかなあと感じています。その当時はそういうことが求められていたのかなと思うんですけども、今の時代って、総合点ではそこまでではないんだけど何か一つの教科とか一つの得意分野が突出しているっていう子たちが、結構社会で活躍するんじゃないかなって感じています。突出しているものを持っている子が自分の行きたい学校に総合点ではかなわないと。でも、ここの高校へ行ってこんなこと

がしたいんだっていうのを持っている子が、その進路に進めるような、そんな方向性っていうのが多様な受け入れみたいな表現なのかなと考えていました。やはり義務教育がどうしても小中学校と、総合力を上げようっていう、できないところをどうにかして、卒業させたいっていう思いでずっとやってきているんですけども。今はできないところはそんなに追求しなくてもいいから、得意なところをしっかりと伸ばしていく。大人もそれぞれが得意を持ち寄って、協働することによって、全体として前進していくっていう、そういう時代かなあって思っています。この入試制度自体が、そういう子どもたちが生きるような制度になっていったらいいのになあ、どうしたらいいのかなというように考えていました。ちょっとぼんやりした意見ですけども。

<松本賢委員>

私も同じような考えで、これをやはり生かしていく、今の徳島県の制度であれば、育成型選抜というふうに思います。ただそこでちょっと足枷になっているのが、やはり学力も確保しなければいけない。それをどうやって見分けるのか、どうやって、高校入試に結びつけるかっていうと、中学校は基礎学力テストをやっています。その基礎学力テストで、やはり高校入試の参考として、そういう制度がありますので、今、年3回行っている基礎学力テストも今後どうなるか、また、中学校の方でひょっとしたらそんな考えも出ているかもしれませんが。在り方についてはですね。全県一区の入試制度までもう少しありますので、それまでにまた考え方なんかも変わっていくのかなというふう思います。以上です。

<金西会長>

ありがとうございます。今いろいろお話伺った限りでは、やはり、このイの多様な能力を評価する選抜に関することと同じ多様な話なので連携しておりますので、今後、とにかく、徳島県の育成型選抜の在り方をどう広く、いろんな中学生がそこにチャレンジできるような形にできるのが多分望ましいんでしょうけど。調査書の在り方も含めてですけども、育成型選抜の在り方が検討されねばならないんだなっていうことを考えた次第でございます。ただ、多くの中学生が受検できたらいいって話ではないので単純にはないんですけども、その辺の在り方ですね、在り方を今後どうするかっていうのは、まさにこの会議での検討する事項ではないかなというふうに考えます。

そうしましたら、次のエでございますけれども、入学者選抜全般に関することで、何か論点を整理する上で、御意見ございましたらよろしくお願いしたいと思います。

<木屋村委員>

中学校側もかなり時間と労力を費やしていると思うんですが、高校側の方から、選抜を実施運営するにあたっての負担っていうふうに受けとめて、ちょっと話をさせていただいて、過去の入試制度の中でも出てきているんですけど。やはりこの年明け。年明けから3月の末まで、今の回数で言いますと、さっきの3回あって、それが、高校側でいうと高3生の進路指導と重なっているわけなんですよね。だからそれをうまくこう乗り切っていくといいますかね。しかも今の時代は特になんですけど、正確さとか、ミスがあってはならないことでもあるので、かなりの人員を割くわけなんですよね、そこには。例えば、大学入学共通テストをたくさん受検したりする普通科等の進学校においてなんですけどね。大体1月の中旬の土日にあって、その直後に育成型選抜の受付をやっている

るんですよね。その間、高等学校は、高3生の個別面談。それから、保護者との面談。そのあと2週間ぐらいの期間は多少あるんですが、1週間2週間の間に出願、高校生の個別の出願の話なんですけどね。それが終わる頃といいますか重なって育成型選拔があつて、採点、可否通知の発送とか、いろんな、そんなのが次、一般選拔についても同じく、国公立大学とかで言えば、中期日程とか後期日程と重なるので、そこはどうしても負担は、もう過去からなのかも知れませんが、出てきているのかなっていうのがあります。一ついえることは、事務处理的な効率化。今年、大学の方は大学入試センターがWeb出願を始めているので、そういうところで何か効率化を図れるようなことがあれば、そんなのも検討できないものなのかなって思います。書類のチェックだけでも、受付したときに不備があつて、もう一度みたいなことも結構あつたりするんですよね。そんなことを考えると、もちろん最終的には目で確認していくのは当然なんですけど、その辺の効率化とか、負担軽減ですか、その辺、今の状態であっても必要なことでないのかなというふうには感じております。以上です。

<滝川委員>

中学校にとりまして、年明けから入学者選拔の流れの中で、子どもたちとの面談であつたり、それから、同じく学力もつけたりしながら、試験に向かわせなければいけない現状があり、日程的にはかなりきつく、3学期がいつもあつという間に流れてしまいます。先ほどの高校側の話を聞いてもそうですけども、本当に流れていくような時間の中で、今、高校側からあつたように、実務上の簡素化というのが図られる部分については、せつかくこの学区制の撤廃に伴う入試制度の進め方を議論するこの機会に、より簡素化されて、少しでもわかりやすく、そして負担もかからないというような形になっていけばいいなということは強く思っています。

<木屋村委員>

私、言い忘れておりました。第2次募集選拔、つまり最後の試験になるわけなんですけど、それぞれの学校で問題を作成したりして、早い段階からです。受ける受検生がいるのかどうかにかかわらず、それもずっと前の段階から準備するわけなんです。あれを、例えばなんですけどね、一般選拔の学力に関して一般選拔の結果をそのまま活かせる、そういう仕組みにさせていただいた方が、面接とか作文とかをしている学校もあるかも知れませんが、それだけでもかなり負担軽減にはなるんじゃないかなって思っております。以上です。

<松本賢委員>

だんだんと、教職員の働き方改革に話になってきているんですけどもね。中学校の受検生からすると、本来、受検生がしなければならない作業を、中学校教員が代理で行っております。で、香川県のように、インターネットでの出願というふうになりますと、これもう個人でのひょっとしたら出願にだんだんと移行していくんじゃないかなって思っております。まだまだ先ですけども、だんだんと変わっていつているんだなど。効率的な、実効的な形で変わっていくんじゃないだろうかと。そこで、やはりいつも私自身ネックになっているのは、基礎学力テスト。また、中学校長会の滝川事務局長がおいでるので、ぜひ、基礎学力テストの在り方なんかは、今後検討していかなければいけないんじゃないかなというふうに思っております。以上です。

<竹内副会長>

私も松本委員さんの話を聞いて、中学教員だったときは、子どものためと思って、先々、こう丁寧に丁寧に子どもに指導してきましたが、果たしてこれが本当に子どもたちの主体性を育てることになっていたのかなっていうのをすごく感じています。この高校の受験に関しても主体的に選択できるようにという方向性が打ち出されているんですけど、主体性を育てるって非常に難しい。どうしても、教員が手を出しすぎるといえるのか、しすぎることによってやはりそれって、子どもたちの主体性を奪ってきたのかな、という反省点があります。入試に関しても、一部の生徒はなんか先生が決めてくれるとか、そんな思いで、自分の進路を決めている生徒もなきにしもあらずでした。この機会に本当に子どもが自分事として自分の将来を考えて、この高校に行って何をしたいんだということを自分の言葉で明確に言えるような生徒を育成することにも繋がっていったらいいなと思いました。ちょっとこうやりすぎているのかもわからないですね、学校が。よかれと思ってやっていることが果たして本当に子どものためになっているのかなっていうのを、ちょっと最近、自分自身の問題としても感じているので、そんなことも含めて入試制度も考えたらなあと思いました。

<金西会長>

徳島県は本当に私立の高校が少ないですから、中学校の本当に入試の指導は、むしろ現場のご努力は並大抵のものじゃないと思うんですが、ほぼほぼ、倍率とかも1に収まるような指導は、並大抵ではないと思うんですけど。他の県は多分もっとそんな話ではないので私立もありますから。あまり先生方のご負担にならないように、入試も、むしろ本人がきちんとチャンスを選択できるように、なればいいですけど。

鳴川委員にお聞きしたいんですけど、高校側の入試事務は大変なんですかね。あれは高校ごとなんですかね。願書の処理とか。

<鳴川委員>

はい。高校ごとです。今御説明いただいたように、1月からはすごく大変ですし、まだ在校生も1年生2年生もいますので、授業をしながら、あと、学年末考査も作成し、評価もし、またその上に負担があります。かなりこの業務っていうのは大変ですし、もちろんミスは許されない業務ですので、かなり学校内はそういう形で神経を使っています。

<金西会長>

松本委員から先ほどありました、香川県はもうネット出願になっているんですかね。

<松本賢委員>

令和8年度入試からと聞いております。

<木屋村委員>

私も全国の校長会に行ったときに、何件かそういうのも聞いています。

<金西会長>

もう、ネット出願が高校の時点で？

<山下委員>

出てきていますね。ちょうど全国学力学習状況調査のCBTに関わってきているっていうタイミングも含めて、多分そういったDXの動きは今後加速されるであろうという

見立てはあります。

<金西会長>

なるほど。大学の方も、もうどんどん出願がデジタルになって参りましたので。これ、お金が予算の話とも関連してきて、デジタル化の出願となると各学校っていうよりは、県での出願の管理ってことになりますので、多分県の方でそのデジタル出願の枠組みの方を整理していただければ。それと連動すると、先ほどの例の複数校の選抜とかも全部連動してくる話なので、連動して参りますんで、多分その辺のデジタルの、出願の複数校の選択とか関係してきますので、またお金の話、予算の話にもなりますけれども、今後、デジタル出願とかいうことも含めて検討の必要があるかとは思います。はい。ありがとうございます。エに関しましてはよろしいですね。

あとその他、何かございますでしょうか。発言しておきたいことございましたら、この機会です。

<木屋村委員>

入試制度の話ではなく中学生の志望校決定の話です。先ほどちらと金西会長からの話に出ていたのですが、中学生にとって、高校の学習内容なども要素ですが、施設・設備面も、かなり大きな要素になっていると思います。中学生が体験入学に参加してみて、「この高校ではこんな施設・設備の中で学べるのだ」という印象をもち、高校選びに影響していると考えています。この部会で議論する話ではないと思いますが、中学生の高校選びという観点を考えた場合、その要素もあるっていうことを、この部会の委員の皆様と共有していただきたいなという気がしております。

<金西会長>

そうですね。環境の問題は、何度も申しますが、徳島県は割と私立の高校はそんなにないですから。でも全国的に見ると、公立と私立との話が出て、私立の方が環境とかが随分充実しているのではというのが、来年以降も、無償化と絡んで、大きな問題になってきそうですね。その辺のことは。お金のあるところにどうしても人が集中してしまいますので。ありがとうございます。その他、何か。はい。

<滝川委員>

今の話とちょっと関連するかもしれませんが、中学生が高校を選ぶときに、今後全県一区になって、より多くの高校から選べる状況になったときに、先ほど出ていました体験入学の機会や各学校の特色ある取組等の情報について、よりわかりやすく生徒たちに伝える必要があると思います。すでに各高校の方でも魅力化や特色化を進め、広報していただいているところではありますが、全県どこに住んでいても、それらの情報にアクセスできたり、体験できたりするという公平性を確保しながら、様々な生徒のニーズに応えられる、つまり、高校の選択肢が広がる入試制度改革であってほしいと思います。どうぞよろしくお願いします。

<金西会長>

はい。

<山下委員>

今日お配りいただいた、「高校魅力化の方策」というパンフレットを拝見して、県を挙げて公立高校の魅力化にこういうふうに取り組み、各学校がそれぞれの特色を生かし

ながら、今日ずっと議論に出てきているスクール・ポリシーっていう言葉でまとめるのではなくて、何が学べるのかという具体化された取組が記載され、カリキュラム・ポリシーのところにフォーカスしているのは素敵だなあと思いました。こういったパンフレットで広報されているっていうのは他県ではなかなか見ないツールだなと、今日拝見してすごく思いました。中学生にとって進路選びというのはちょっと難しいですし、まだまだ発達段階の途中にある生徒さんたちが自分の意思で主体的に決めるってことは、目指すところはそこではありながらも、なかなか難しいところがあるというのも現実だと思っています。ただ、なんでしょうね。彼らが、だからそれでいいのかということとそうでもないと思っていて、何をお伝えしたいかということ、今現状、校舎や制服でしか選べないっていう現実が仮にあるんだとしたら、何か考えるべきことがあるんじゃないかと思うのです。他県の事例で大変恐縮ですが、新潟県には中等教育学校が6つあるんですが、もっと言えば、ついこの間まで7つあったんですが、1つもう募集停止になりました。残り6つのうち、定員を超えている倍率を超えているのは2校しかないんです。で、その中でも、募集定員を、唯一100名を超えている学校が、豪雪地帯の中山間地域にある学校なんです。寮でないと通えないんです。けど、生徒たちは、そこで学びたいから選んでいます。保護者の理解も含めてだと思えるんですが、やはりそういった学びの内容の部分も、考えていく機会になるといいのかなということを、ちょっと最後だけ発言させていただきました。

<金西会長>

ありがとうございました。

<松本賢委員>

私の立場として、徳島県教育委員会24市町村の教育委員会連合会の会長という立場と、それとあと、徳島市教育委員会教育長という立場で、今、来ております。今年度の入試を見ますと、定員割れしている高校も多数あります。今後、学区外流入率撤廃によって、さらにその傾向がひょっとしたら強くなる。これも可能性ですけれどもね。可能性も高まるかと予想されます。親会の高校の在り方会議によって、また、高校規模の適正や魅力化、特色化等の検討に加えて、入試制度部会においても、第2次募集選抜の在り方っていうのは、今後検討する必要があるかと思えます。学区外流入率の撤廃によって、最も影響を受けるのが徳島市の中学生であるというのはもう間違いありません。やはり、中学生までに力をつけて、それで高校選択するということですが、その徳島市のことを考えますと、やはり大きな変化をもたらすんじゃないかなということで考えられます。難しい志望校選択、高校選択における中学生の不安を少しでも軽減するために、各高校の募集人員の決定については、中学校の進路希望調査、校長会のもありますし、それからあと、県教育委員会もやっていますけれども、その結果によって一層重視して決定していただきたいなというふうに思います。やはりどうしてもこの徳島市の中学生のことを考えると思います。どうぞよろしくお願いします。以上です。

<金西会長>

あと、どうですか。せっかくです。

<鳴川委員>

はい。発言の機会をいただいて。私自身も、この、スクール・ミッションとかそうい

う難しいところではなくて、先月7月の末に本校も体験入学会をさせてもらって、500人ぐらいの中学生に来ていただきましたが、私も声をかけると、学校の特色で今年度から行っているエデュケーションプログラムを体験したいということで、全県というか、徳島市や小松島からも、学校見学体験に来てくださっていましたので、今後、内容が中学生にしっかりわかるように広報していきたいと思いました。2学期に入りますと、学校説明会ということで、短時間ですが各中学校さんには学校を紹介させていただく機会がありますので、その時間、その時に、しっかり学校の魅力を伝えるような準備を、学校としてはしていくべきなのかなというふうに考えています。また、本校の体験入学になぜ参加したかを生徒さんに聞くと、家が近いからっていうのもあったのですが、今年度から始まったエデュケーションプログラムをテレビや報道で知って体験にきたようです。私としては、マスコミさんには、広報という形でお手伝いいただきながら、学校の魅力をしっかり発信できればと思います。それは、自分の学校だけじゃなく他校についても普通科の特色をしっかりと発信していくことが重要なのかなとこの会議で感じました。

<金西会長>

意見はいろいろ出たかなというふうに思いますが、どうぞ。

<竹内副会長>

最近大学生と接していると、生成AIを友達のように使っているんですね、スマホの中の。これがどんどん加速していくんだろうなって、去年と今年はまた違うんです。こういうふうな時代になってきたときに、学力って何だろうって、すごく今考えています。高校、中学、小学校の教育の在り方自体も少し方向性が変わってくるのかなあとも思っています。令和11年度入学者選抜からの変更ということなので、もう少し先のことなんでしょうけど、その先を予想しながら、どういう入試制度がいいのかなっていうのを考えていく必要があると思います。今の課題を穴埋めするような改革にしまうと、5年後にはもうそれは役立たないよってなってしまうかもわからないので、やはり急速な社会の発展というのを、変化しているよっていうことを、やはり私たちも勉強して、5年後10年後ぐらいのイメージを持ちながら、学校教育のことも考えて、いい制度を作っていきたい。具体的なものを提案するには、ちょっと勉強しないといかんなって感じました。勉強します。

<金西会長>

ありがとうございます。はい。そうしましたら、その他に関しまして、議題3に関しいろいろな皆様の御意見を今日、第1回目でございますので、第1回目で、それぞれの委員の皆様の意見交換できたことは非常に重要な機会だったなというふうに思います。それぞれの御意見等を伺ったことで、ありがとうございます。これでは、議題2は、以上にしたいと思いますのでありがとうございます。特に、結論出すとかいうことではございません。

4のその他でございますが、その他はこちらの方では特に、皆様から何かございましょうか。よろしいでしょうか。そうしましたら、4に関しまして事務局から何かございましょうか。

<事務局>

はい。その他ということで、本日御欠席の松本和基委員さんから、事前に一部御意見をいただいておりますので、御紹介をさせていただきたいと思います。ウの生徒の多様な受け入れに関することについて、調査書の見直しにおいて、合否判定に使用しない項目の必要性を検討することは意義があると思う。ただし、調査書への記載を意識して、登校に努める生徒もいることは事実であり、慎重な検討が必要である。それから、エの入学者選抜全般に係る負担に関することでは、受検機会を増やすことを考えると、生徒や保護者にとって複雑になる出願方法を支援できるよう、生徒個々がネット出願できるシステムの構築が必要ではないか。それから、オのその他でございますが、スクール・ポリシー等に基づく特色ある学校づくりは重要である。その一方で、施設の新設など、ハード面の充実も子どもたちにとって大きな魅力であり重要であると考えます。徳島市内と、県西、県南の高校間で施設格差が生じないように、少子化の状況を踏まえ、統合も視野に入れつつ、新校舎の建設を望みます。以上でございます。

では、その他ということで、私の方から、今後の開催スケジュール等について御説明させていただきます。資料5を御覧いただけますでしょうか。

今後の開催スケジュール等について、事務局より、「資料5」に基づき説明。

<金西会長>

はい。ありがとうございます。スケジュールの方の確認をまたよろしく願いをいたします。それでは本日用意しておりました議題は以上でございます。各委員の皆さま、長時間にわたりまして、こちらの不手際で長くなったことを申し訳なく思います。あと、議論の進行には皆様にご協力賜りまして、本当にありがとうございます。今後、いろいろ皆様からいただきました御意見をもとに、順次、テーマごとに整理をしていって検討を進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

本日出たのは、受検の回数に関する事、それを単に回数にするのか、選択を複数するのかということが出たかと思っております。それから、育成型選抜の在り方が大きな問題で、調査書等含めての問題になると理解をしております。それから、出願に関しましても、今後、デジタル出願っていうことを含めて、全県でできればというようなことが幾つか出たと思っておりますので、順次、検討しできればというふうに考えております。よろしくお願いいたします。

それでは議事の進行をお返ししたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

(事務連絡)

(閉会)